動詞の活用

田附　敏尚

1　調査の目的と概要

ここでは、2005・2006年度に行った気仙沼市の方言調査の結果を報告する[注1]。2005年度の調査では、気仙沼市における動詞の活用体系を把握するため、高年層3名、若年層2名に対して動詞の活用に関する面接調査を行った。調査期間・調査時間も限られていたため、調査したのは動詞28語、動詞の後接形式12形式についてである。これだけでは動詞全体の活用体系を描くことは出来ず、今後の追調査が必要となるが、今回はひとまず概括的に全体を捉えることにつとめ、活用体系の素描としてここに報告する。2006年度の調査では、2005年度の調査で得られた結果をもとにアンケート調査を行った。その詳細は4節で述べる。

1.1　調査項目

2005年度に調査した動詞は、以下の28語である。五段動詞は各行の語を入れ、また、ラ行・ワ行五段動詞については共通語と異なる活用となることが見込まれたので、調査語数を多くした。

- 五段動詞　書く・行く（カ行）、脱ぐ（ガ行）、消す（サ行）、立つ（タ行）、死ぬ（ナ行）、飛ぶ（バ行）、読む（マ行）、取る・入る・走る・蹴る・喋る（ラ行）、買う・洗う・吸う・食う・背負う・思う（ワ行）
- 一段動詞　見る・起きる（上一段）、出る・寝る・消える・教える・考える（下一段）
- カ変動詞　来る
- サ変動詞　する

調査した後接形式は以下の12形式である。否定、終止、命令などを中心に、基本的なものを調査した。

否定（ネー）、受身（レル）、使役（セル）、希望（テー）、丁寧命令（イン）、音便（テ）、推量・意志（ベ）、終止（～。）、連体（～トキ）、禁止（ナ）、条件（バ）、命令（～！）

便宜上、それぞれの後接形式につく活用形を「否定形、受身形、使役形……」と呼ぶこととする。また、そもそも「ラ行五段動詞」「下一段動詞」などの名称は共通語のものであって、当該方言でもそれがすべて当てはまるわけではないが、これもまず便宜としてその名称と枠組みで記述していく。

1.2　調査の観点

上記の語形や後接形式を設定したのは動詞活用全体の概括的な把握が目的ではあったが、特に以下のような点についても配慮してのことである。

調査語に関しては、ラ行五段動詞の中でも「入る・走る・蹴る・喋る」は形態上、一段動詞に近似しているため、一段動詞のような活用が現れる可能性がある。

ワ行五段動詞に関しては、その連母音の融合がどのようになっているかが問題となる。「洗う」の終止形は、岩手県の陸前高田市や一関市で「アラー」「アロー」となるという報告があり（斎藤(2001)）、これらの地域と比較的近い気仙沼市ではどのようなかたちになるのかが問題となる。

後接形式に関して、まず使役では一段動詞において「サセル」が出るか「ラセル」が出るかがポイントとなる。一段動詞に「ラセル」がつくと、ラ行五段動詞の使役形と見かけ上同形となるため、これは一段動詞のラ行五段化に関わる問題となる。

推量・意志では、その音便が撥音便を取るか促音便を取るかが問題となる。先行研究からは大まかに言うと岩手側は撥音便、宮城側は促音便となっていると言えるが、では宮城県にありながら岩手県に接する気仙沼はどうなっているのか、その現状を確かめることが必要である。

条件では、岩手県に「ア段＋バ」（書かば、など）が確認されている（国立国語研究所（1994）『方言文法全国地図』（以下 GAJ）第 3 集 132～135 図を参照）。これが気仙沼市には現れるのか否かを確認したい。

以上のような点に留意しつつ、調査を行った。

1.3　調査の方法

調査は、共通語形を提示し、それを方言語形に翻訳してもらう方法をとった。まずは、後接形式を使うか否かを確認し、動詞についてもその終止形を用いて、その動詞を使うか否かを確認した。調査項目は 28 語×12 形式＝336 項目である。

2　高年層の調査結果

ここではより伝統的な形式を保持していると考えられる高年層 3 名の結果を報告する。3 名とも言語形成期を気仙沼市で過ごしており、調査時点でも気仙沼市在住の男性である。調査項目をほぼすべて調査することが出来た KY 氏の結果を土台として、他の 2 名の方（KE 氏、ON 氏）の結果も合わせて一つの表として提示する（次頁表 1）。そして、以下ではまず不変化部についての結果を述べ、各後接形式と変化部については、表 1 の中で特に共通語と異なる点について述べる。

2.1　不変化部

表 1 には KY 氏において回答された不変化部を挙げた。インフォーマントによっては多少異なるので、それも含めてここに記す。

まず「行く」の不変化部は、ON 氏は/ig/で安定しているが、KY 氏は/ig/~/iŋ/の間で、KE 氏は/ig/~/eŋ/の間で揺れがあった。「死ぬ」は KY 氏はほぼ/sün/だったが、KE 氏は/sïŋ/という不変化部が多く現れた。「入る」「背負う」「教える」は KY 氏において連母音融合が起こり、「入る」では/hair/→/hεεr/、「背負う」では/seow/→/ʃow/、「教える」では/osie/→/oʃee/が見られる。加えて、KE 氏は「消える」

表１：気仙沼市の動詞の活用

			後接形式	否定	受身	使役	丁寧命令	希望		音便		終止	連体		推量・意志		禁止	条件		命令
不変化部				nee	reru	seru	iN	tee	dee	te	de	Ø	togi	dogi	pe	be	na	ba	ba	Ø
五段	カ行		書く	ka(g)	a	a	a	a	i		(i)	u		u		u	u	e	*	e
			行く	i(g~ŋ)	a	a	a	a	i	(Q)		u		u		u	u	e	a	e
	ガ行		脱ぐ	nu(ŋ)	a	a	a	a	i		(i)	u		u		u	u	e	a	e
	サ行		消す	ke(s)	a	a	a	a	i	i		u		ï		u	ü	e	*	e
	タ行		立つ	ta(d)	a	a	a	a	i	(Q)		u		u		u	ü	e	*	e
	ナ行		死ぬ	sü(n)	a	a	a	*	i		(N)	u		u		u	u	e	a	e
	バ行		飛ぶ	to(b)	a	a	a	a	i		(N)	u		u		u	u	e	*	e
	マ行		読む	jo(m)	a	a	a	a	i		(N)	u		u		u	u	e	a	e
	ラ行	(−2拍母音o)	取る	to(r)	a/(N)	a	a	a	i	(Q)		u	(Q)	u	(Q)	*u*/*(N)*	u/(N)	e	a	e
		(−2拍母音i)	入る	hɛ[ɛ(r)]	*(N)*	*	a	a	i	[Q]		u	*	*	*(Q)*/*[Q]*		(N)	e	*	e
		(−2拍母音i)	走る	hasü(r)	(N)	a	a	a	i	(Q)		u	(Q)	u	(Q)		u/(N)	e	*	e
		(−2拍母音e)	蹴る	ke(r)	a/(N)	a	a	a	i	(Q)		u	(Q)	u	(Q)		u/(N)	e	a	e
		(−2拍母音e)	喋る	ʃabe(r)	a/(N)	a	a	a	i	(Q)		u	(Q)	u	(Q)		u/(N)	e	*	e/*o*
	ワ行	(−2拍母音a)	買う	k[a(w)]	a/*(a)*	a	a	a	(i)/*[ɛæ]*	(Q)		(u)		(u)		(u)/*(a)*	(u)	(e)/*[ɛæ]*	*	(ẹ)
		(−2拍母音a)	洗う	ar[a(w)]	a/*(a)*	a	a	a	(i)	(Q)		(u)		(u)		(u)	(u)	(e)/*[ɛæ]*	*	(e)
		(−2拍母音u)	吸う	su(w)	a	a	a	a	(i)	(Q)		(u)		(u)		(u)	(u)	(e)	*	(e)/*(ẹ)*
		(−2拍母音u)	食う	k[u(w)]	a/*[aN]*	a/*[a]*	a	a	(i)	(Q)		(u)		(u)		(u)	(u)	(e)	a	(ẹ)/*[ee]*
		(−2拍母音o)	背負う	ʃo(w)	a	a	a	a	(i)	(Q)		(o)		(o)	(Q)	(o)	(o)	(e)	a	(ẹ)
		(−2拍母音o)	思う	omo(w)	a/*(Ø)*/*(o)*	a	a	a	(i)	(Q)		(o)		(o)		(o)	(o)	(e)	a	(ẹ)
一段	上		見る	mi	Ø	ra	sa/ra	ra/sa	Ø		Ø	ru	Q	ru	*Q*	*ru*/*N*/Ø	ru/N	re	ra	ro
			起きる	ogi	Ø	ra	sa/ra	ra	Ø		Ø	ru	Q	ru	Q	Ø	ru/N	re	ra	ro
	下		出る	de	Ø	ra	sa	ra	Ø		Ø	ru	Q	ru	Q	*ru*/*N*/*Ø*	ru/N	re	ra	ro
			寝る	ne	Ø	ra	Ø	ra/sa	Ø		Ø	ru	Q	ru	Q	*Ø*	ru/N	re	ra	ro
			消える	kie	Ø	*	*	ra	Ø		Ø	ru	Q	ru	Q		ru/N	re	*	ro
			教える	oʃee	Ø	ra	sa	ra	Ø		Ø	ru	Q	ru	Q		ru/N	re	*	ro
			考える	kaNŋae	Ø	ra	sa	ra	Ø		Ø	ru	Q	ru	Q		ru/N	re	*	ro
変格	カ行		来る	k	o	ora	osa	*	i	i		uru	uQ	uru	uQ	uru	uru/uN	ure/*ore*	*	oi/*oi*/o
	サ行		する	s	i/*ü*	a	*	ïra	i	ï		uru	uQ	uru	uQ	*uru*/*u*	uru/uN	ure	*	ïro/*üro*

※表の見方を示す。
基本的には、不変化部—変化部—後接形式をつなげれば語形が復元できるようになっている。
例)「書く」の否定形　kag-a-ne → kagane
表中の「Ø」は、変化部がなく直接不変化部に後接形式がつくことを表す。
例)「見る」の否定形　mi-Ø-ne → mine
また、終止形、命令形の後接形式も何もつかないということを「Ø」で示した。
五段動詞の不変化部と変化部に現れる( )や[ ]は、音便などによりその括弧内が交替することを示す。
例)「入る」の否定形　hεε(r)-(N)-ne → hεεNne
「入る」の音便形　hε[εr]-[Q]-te → hεQte
表中、変化部の太字斜体のものは、KY 氏以外の方の回答であることを表している。また「*」は 3 名のいずれからも回答が得られなかったものに付している。
※子音は/k, g, ŋ, s, t, d, n, h, b, m, r, w, ʃ/を認めておく。「シ」は実際の発音が[ɕi]であっても/si/と解釈する。同様に「ヂ」は/di/、「ヅ」は/du/である。また、特殊拍は促音を/Q/、撥音を/N/とし、長音は母音を重ねることで表す。
※母音に関しては、無理にまとめることはせず、ある程度出てきたままに残しておく。これは、当該方言において母音の体系が把握できていないため、どの母音とどの母音が解釈上同じなのか（または異なるのか）の判断が付けられないからである。

で/kie/→/kee/、「考える」で/kaNŋae/→/kaNŋεε/という不変化部も現れた。

2.2　否定形

否定形の後接形式は/nee/もしくは/ne/という形式が現れた。KY 氏はおおむね五段動詞が/ne/と短く、一段・カ変・サ変は/nee/であったが、長さも均一ではなくその境目が判然としないため表では/nee/で代表させた。これらは KE 氏においては/nεæ/、/nεε/もしくは/nε/となる[注2]。

この活用形は、ラ行五段動詞において撥音便が現れる。「取る」「蹴る」「喋る」では「トラネ」「ケラネ」「シャベラネ」という非音便形も現れているが、「取る」「蹴る」「喋る」という動詞個別の問題ではなく、ラ行五段動詞全体で音便形・非音便形のどちらでも適格であり、その中でも撥音便の方が優勢だということであろう。

また、特徴的なのはワ行五段動詞である。KE 氏においては、「カワネ」「アラワネ」が「カーネ」「アラーネ」のようになり、母音/a/に挟まれた子音/w/が脱落している。この/awa/という音環境は受身形・使役形、丁寧命令形などにも発生するが、KE 氏においてはこれらは未調査であるため、すべてそうなるかはわからない。ただし、近隣の陸前高田市や一関市では「アラーネァー（洗わない)」とともに「アラーセル（洗わせる)」という語形が現れるので（斎藤（2001）を参照)、気仙沼市においてもそうなる可能性は指摘できよう。

同じく KE 氏からはワ行五段「思う」の否定形において「オモネー」「オモーネー」という語形が得られた。また、「食う」では「カンネ」が得られた。いずれもこれだけではデータ不足であり、ここから考察することはできないので、今回は現象の指摘にとどめる。

サ行変格「する」では KE 氏、ON 氏からほぼ「スネァー」に近い/sɯ̈nεε/が得られた。これは「シ」と「ス」の音声が接近するという東北方言一般に見られる現象によるものである。「する」において同様の現象は以下、丁寧命令形、音便形、命令形においても見られ、いずれも共通語で/i/となると

ころで中舌寄りの/ï/が観察されている。これは「シ」が「ス」に近くなる例だが、逆にサ行五段動詞「消す」では、連体形「消す時」や禁止形「消すな」などで、共通語で「ス」となるところで「シ」に近い音（/kesïdogi/ /kesüna/）が見られたこともここに記しておく。

2.3　受身形・使役形

受身形と使役形は、いわゆる学校文法では五段動詞は「れる（受身）」「せる（使役）」、一段動詞は「られる（受身）」「させる（使役）」と後接形式を変化させるが、ここでは受身を「レル」、使役を「セル」に固定し、「ラレル」のラや「サセル」のサは変化部に含める。さて、その点を踏まえた上で表 1 を見ると、受身形は共通語と同じだが、使役形は多少異なっていることがわかる。

それは、上一段動詞において「サセル」とともに「ラセル」が出現しているという点であり、これは調査の観点で示したとおりである。この項目は KY 氏のみの回答であるが、「見る」「起きる」、また調査項目外で尋ねた「着る」でも「ラセル」が出現している（ミラセル、オギラセル、キラセル）。下一段動詞ではどうかという点についても尋ねたが、下一段動詞では「ラセル」は使わないとのことであった（*デラセル、*オシェーラセル、*カンガエラセル）。少なくとも KY 氏においては上一段動詞のみで「ラセル」が出現すると考えてよいだろう。

2.4　丁寧命令形

丁寧命令形は、「～しなさい」というような意味となるものであり、基本的には後接形式/iN/に接続する変化部の母音はア段が現れている。

丁寧命令形に関しては、「食う」では「クワイン」とともに「タベライン」、「来る」では「オイデライン」が回答された。そして、KY 氏によれば「クワイン」よりも「タベライン」のほうが優勢だということであった。これは「食う」と「食べる」という動詞において、より丁寧な「食べる」の方が丁寧命令として使うときは適当だということであろう。

また、「見る」「寝る」に関しては「ミライン」「ネライン」の他に、「ミサイン」「ネサイン」という語形も見られた。とりあえず今回はこの活用形に含めたが、五段動詞の方でも/saiN/という形で現れてくるようであれば/iN/とは別の後接形式として分けることも考えられる。これは例えば「書く」が「カギサイン」となれば、/saiN/が後接形式となり、一段動詞も含めていわゆる連用形接続として考えることが出来る、ということである。これもさらなる調査が必要である。

2.5　希望形

希望形はカ行変格「来る」、サ行変格「する」がそれぞれ「キテー」「シテー」となる以外は、「書く」は「カギデー」、「見る」は「ミデー」となり、すべて「デー」と有声化する。KE 氏は「買いたくなるから」が「ケァーデグナッカラ」となっていたので、/kai/→/kɛæ/となり不変化部を巻き込んでの形態変化が起こっている。これは同じ音環境をもつ「洗いたい」でも起こるものと考えられるが、これに関しては未確認である。

2.6　音便形

音便自体は他の活用形でも現れるのだが、ここで挙げるのはいわゆるテ形である。この変化部はほぼ共通語と変わらない。一点、「入る」が促音便を取る時、語幹の長音が短くなる点には注意を要する（「入って」は/hεQte/）。促音の前の長音が消去される（もしくは短くなる）という音韻規則が働いている可能性がある。同じく促音便となる推量・意志形でもやはり長音が保持されている形式（/hεεQpe/）とともに、長音が短くなっている形式（/hεQpe/）が回答されていることもここに記しておく。

共通語と異なるのは後接形式の方で、共通語では一段動詞に接続するとき、「見て」「出て」など「テ」に接続するが、気仙沼市では、これらはすべて「デ」に接続される。

2.7　終止形

終止形で共通語と異なるのは、ワ行五段動詞の次末位拍（以下、-2 拍と呼ぶ）の母音が/o/である場合、変化部は長音となり、「背負う」が「ショー」、「思う」が「オモー」となる点である。これによって、共通語の終止形はすべてウ段で終わるところが、気仙沼市ではオ段も入り込むこととなる。

2.8　連体形

ここで連体形として挙げたのは、具体的には「～する時」のように「トキ」に続くものである。

結果を見てみると、終止形が「ル」で終わるもの（ラ行五段、一段、カ変、サ変動詞。以下、これらを一括して「ル語尾」動詞と呼ぶ）は促音便が非音便形とともに現れ、それ以外は終止形と変わらない。促音便は、「ル」の代わりに現れていると言えよう。また、「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となるのは終止形と同様である。「消す」において「ス」の母音/u/が中舌寄りになり、むしろ/i/の中舌音となっていることは先に述べたとおりである。

基本的に「トキ」は有声化して「ドギ」[dogi]となるが、促音便の後では多少その[d]の有声化が薄れ、[ʈogi]もしくは[togi]となる（表 1 ではこれらをまとめて/togi/とした）。

2.9　推量・意志形

ここで挙げた後接形式「ベ」は推量の意味としては共通語の「だろう」、意志や勧誘の意味としては共通語の「う・よう」に相当する。今回は「ベ／ペ」に接続していれば、このうちどの意味で捉えられていてもその点は不問とする。

さて、表 1 を見ると、これも連体形と同様、「ル語尾」動詞において促音便となっている。連体形と比べると非音便形もあまり回答されていないことから、音便形の方が優勢的に使われているであろうことが窺われる。また、「取る」「見る」「出る」においては撥音便も確認されたが、あまり活発に使われる状況にはないようである。例えば ON 氏は撥音便形を確認しても自分は使わないとのことだった。調査の観点のところで挙げた促音便か撥音便かという問いに対しては、促音便が優勢

的に用いられるという答えとなるだろう。

他にも体系的な特徴としては、「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となったが、これは終止形、連体形と同様である。また、一段動詞の「見る」「起きる」「出る」「寝る」において不変化部に直接後接形式が接続するものが見られた（ミベ、ネベなど）。「ル」の脱落という点では「する」の「スベ」もこれらと同じ方向性のものかもしれない。「スベ」に関してはGAJ3-111図、114図から気仙沼市周辺（特に岩手側）に見られるので、これらとの関連性が考えられる。また、佐藤・加藤（1972）において、三陸地方南部では意志を表す場合に語幹（不変化部）に接続する「ベー」が現れるという言及がなされているので、表す意味によって使い分けがある可能性もある。

他に、今回の調査からは個別的な現象として見られるのは、「買う」の「カーベ」と「背負う」の「ショッペ」である。「買う」における「カーベ」の場合、否定形において現れた「カーネァー」は子音/w/の脱落という考えが成り立ったが、こちらは/au/→/aa/という変化を想定する必要があるため、否定形とはまた別に考える必要がある。ただし、斎藤（2001）によると陸前高田市において「洗うべ」が「アラー(ン)べ」となるようなので、ワ行五段動詞で-2拍母音が/a/の場合、広くそのような接続が使用されている可能性はある。少なくとも同じく-2拍母音/a/の「洗う」が同じような接続の仕方を見せるかどうかを確認する必要があろう。「背負う」における「ショッペ」はKE氏の回答だが、同じくワ行五段動詞である「食う」は「クッペ」にはならないということであった。これに関しては少なくとも同じくワ行五段動詞であり、かつ同じく-2拍母音が/o/である「思う」が「背負う」と同じような接続の仕方を見せるかどうかを確認しなければ、これらが体系として扱えるかどうかはわからない。

2.10　禁止形

これも連体形、推量・意志形と同じく「ル語尾」動詞に音便形が現れているが、ここで現れている音便は撥音便である。「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となるのは終止形、連体形、推量・意志形と同様である。他に、「消す」「立つ」において、変化部の母音/u/が中舌寄りになっていたことも記しておく。

2.11　条件形

条件形では、「エ段＋バ」の形とともに、「ア段＋バ」も見られた。「ア段＋バ」はKY氏によれば「（～する）のであれば」という意味だという。つまり、「エ段＋バ」と「ア段＋バ」には意味的な使い分けが明確にあることになる。「ア段＋バ」の方はそれが認められる動詞と認められない動詞があるが、これは調査時に「（～する）のであれば」という意味での例文をうまく作ることが出来ず、意味的にそれがないものと判断された可能性が高く、正しい例文が提示できれば空き（表中の「*」の部分）も埋まるものと思われる。

共通語との違いで言えば、ON氏の回答において、「来る」の条件形として「コレバ」が得られた。これはGAJ3-130図でも気仙沼市周辺に見られた語形である。

この他、KE 氏において、「買えば」「洗えば」でそれぞれ「ケァーバ」「アレァーバ」が見られた。/kae/ → /kεε/もしくは/kεæ/という音変化が起こり、不変化部を巻き込んだ形態変化が起こっているものと見ることが出来る。

2.12　命令形

命令形において共通語と異なる点は、まずカ行変格「来る」において「コ」という語形が現れていることが挙げられる。また、KE 氏においては「来い」の/i/が若干広口となり、「コエ」に近い発音も見られた。逆に、ワ行五段動詞においては/e/が狭口となり、例えば「背負え」が「ショイ」に近い音となる現象も見られた。

この他、KE 氏においては、「食え」の/ue/が/ee/となっていた。また、「喋る」の命令形では、「シャベレ」とともに「シャベロ」が現れた。この後者の点については調査の観点でも述べたとおり、「喋る」が一段動詞に形態的に近いため、一段動詞のような命令形を生み出したものと考えることが出来る。

2.13　ここまでのまとめ

ここで、調査の観点に関して結果に即してまとめて述べることとする。

まず、ラ行五段動詞「蹴る」や「入る・走る・喋る」に下一段のような活用が現れるか否かという点だが、これについては「喋る」の命令形において「シャベロ」が見られた。

ワ行五段動詞に関しては、終止形にこそ「アラー」「アロー」などのかたちは出現しないものの、「買う」の否定形に「カーネァー」、「洗う」の否定形に「アラーネァー」、「買う」の推量・意志形に「カーベ」が現れた。また、「買う」の希望形に「ケァーデグ」（買いたく）、「買う」「洗う」の条件形に「ケアァーバ」「アレァーバ」が見られることから、連母音の融合によって不変化部を巻き込んだ形態変化が起こっていることが確認できた。これらは連母音融合が活用形個別に形態的な変化をもたらしてはいるものの、それがその動詞全体に影響を及ぼすまでには至っていないとみることが出来る。

後接形式に関して、一段動詞の使役において「サセル」が出るか「ラセル」が出るかという点だが、これは上一段動詞に「ラセル」が見られた。これにより、「ミラセル」「オギラセル」という語形ができ、ラ行五段動詞「トラセル（取らせる）」「ハシラセル（走らせる）」と語末の部分が同じくなる。つまり、上一段動詞がラ行五段動詞に活用を近づけたということが出来るのである。

推量・意志では、その音便が撥音便を取るか促音便を取るかが問題となるのであった。これは、撥音便も多少は見られるものの、促音便が優勢という結果が得られた。

条件では、気仙沼でも「ア段＋バ」（書かば、など）が確認された。これは「エ段＋バ」と意味的な使い分けがあるようであった。

3　若年層の調査結果

さて、2005年には若年層の調査も行っている。高年層の調査結果と多少異なる部分もあるので、それをここに記しておく。

まず、不変化部に関して、連母音融合があまり起こらなくなっていることが挙げられる。「背負う」において/seow/→/ʃow/は安定して現れるが、「入る」における/hair/→/hεεr/、「考える」における/kaNŋae/→/kaNŋεε/は部分的にしか現れず、「消える」「教える」では連母音融合が起こらなかった。全体的に有声化もあまり起こらず、「書く」「行く」「立つ」「起きる」の不変化部も有声化することはあるものの、それぞれ /kak/ /ik/ /tat/ /oki/ が優勢的に用いられている。

否定形ではワ行五段動詞で撥音便が見られる。「買わない」が「カンネ」、「吸わない」が「スンネ」、「背負わない」が「ションネ」、「思わない」が「オモンネ」、「食わない」は「カンネ」であった。ただし、「洗わない」の「アランネ」は言わないとのことだった。また、カ行変格「来ない」でも撥音が挿入され「コンネ」という語形が確認された。

丁寧命令形では/iN/ではなく/i/という後接形式が得られた。これは、「書く」が「カカイ」、「見る」が「ミライ」などとなる。高年層においても実は/iN/の撥音があまり聞こえないこともあり、若年層だから/i/になっているかどうかは不明である。また、「来る」の丁寧命令形では「キライ」「コライ」とともに「ライ」という語形が得られた。この「ライ」は老若問わず使うということだったので、調査量を増やせば高年層からも得られる語形なのかもしれない。

希望形は高年層では/dee/が優勢であったが、若年層においては有声化しない/tee/が優勢的に用いられている。

高年層では終止形、連体形、推量・意志形、禁止形においてワ行五段-2拍母音/o/の「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となっていたが、若年層ではこれらは「ショウ」「オモウ」である。

推量・意志形ではやはり「ル語尾」動詞において促音便が優勢である。撥音便もあるかを尋ねると、使わなくはないが稀だという回答が得られた。また、高年層においてワ行五段「背負う」で「ショッペ」が見られたが、これは若年層でも同じである。加えて若年層ではワ行五段「買う」「吸う」「食う」において非音便形とともに撥音便形も確認された。「買う」は「カンベ」、「吸う」は「スンベ」であり、「食う」は「カンベ」となる[注3]。また、バ行五段「飛ぶ」でも撥音便「トンベ」が見られた。

条件形では、サ行変格「する」において「スレバ」とともに「セーバ」が得られた。この長音は若干短く発音されることもある。

命令形では、高年層で見られたカ行変格「来る」の「コ」という語形は、若年層では聞けばわかるがあまり使うことはないという。高年層では「喋る」にだけ現れた一段動詞的な「シャベロ」のような語形は「蹴る」にも現れ（「ケロ」）、「入る」も「ハイロ」は言わないが連母音が融合した「ヘァーロ」であれば使うということであった。また、これについては調査項目外の動詞についても尋ねてみたが、その結果「ねじる」でも「ネジロ」を使うとの回答が得られた。

4　アンケート調査

4.1　調査概要

このような状況を踏まえて、2006年度には気仙沼市生え抜きの方々に対してアンケート調査を行った。調査対象者は高年層22名、中年層16名、若年層16名、少年層20名の全74名、このうち回収できたのは65名分で回収率は90%である。

調査したのは、2005年度の調査において確認された「シャベロ」「ケロ」などの命令形がどのような単語に現れるのか、またそこの世代差があるのかという点と、推量・意志形において「ル語尾」動詞は促音便や撥音便となったが、ここに世代差はあるのか、という2点についてである。

まず1点目については、一段動詞に形態的に近いものに命令形「ロ」が現れるのではないかという予測から、-2拍母音が/i/と/e/のラ行五段動詞を、拍数を変えていくつか挙げた。具体的には「切る」「蹴る」「練る」「入る」「走る」「ひねる」「しゃべる」「裏切る」「持ち帰る」の9つである。これらについて、以下のような質問文で、二択の選択式で回答してもらった。

> 1．「髪が伸びてボサボサだから、髪を**切れ**」と言うとき、「**切れ**」の部分を「**切ろ**（き）」と言うことがありますか。
>
> 1．ある　　2．ない
>
> 2．「ボールをこっちに**蹴れ**」と言うとき、「**蹴れ**」の部分を「**蹴ろ**（け）」と言うことがありますか。
>
> 1．ある　　2．ない

これらとの比較のために-2拍母音が/a/の「上がる」、/u/の「もぐる」、/o/の「戻る」についても同様に回答してもらった。

> 10．「波が高くて危ないから陸へ**上がれ**」と言うとき、「**上がれ**」の部分を「**上がろ**」ということがありますか。
>
> 1．ある　　2．ない
>
> 11．「深く**もぐれ**」と言うとき、「**もぐれ**」の部分を「**もぐろ**」ということがありますか。
>
> 1．ある　　2．ない
>
> 12．「さっさと仕事に**戻れ**」と言うとき、「**戻れ**」の部分を「**戻ろ**（もど）」ということがありますか。
>
> 1．ある　　2．ない

また、逆に一段動詞の命令形の変化部に「ロ」ではなく「レ」が現れることがないのかを探るために、以下の2問も設定した。

１３．「もう９時だよ。早く**起きろ**」と言うとき、「**起きろ**」の部分を「**起きれ**」ということがありますか。

１．ある　　２．ない

１４．「もう夜遅いから早く**寝ろ**」と言うとき、「**寝ろ**」の部分を「**寝れ**」ということがありますか。

１．ある　　２．ない

推量・意志形において「ル語尾」動詞の音便が促音便となるか撥音便となるかという問題については、以下の設問を用意し、回答してもらった。

１５．「一緒に**帰ろう**」と言うとき、「**帰ろう**」の部分はなんと言いますか。ふだん使うものすべてに○をつけてください。

１．かえっぺ（けぇっぺ）　２．かえんべ（けぇんべ）
３．かえるべ（けぇるべ）　４．かえろー（けぇろー）
５．その他　（　　）

4.2　調査結果と考察

4.2.1　-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の命令形

以下に調査結果を示す。表 2 が-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の命令形の結果である。また、その全体を棒グラフで示したのが次頁図 1、各年層の値を折れ線グラフで示したのが次頁図 2 である。

表２：-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の命令形

	切ろ	入ろ	走ろ	裏切ろ	蹴ろ	練ろ	ひねろ	しゃべろ	持ち帰ろ
拍数	2	3	3	4	2	2	3	3	5
-2拍母音	i	i	i	i	e	e	e	e	e
高年層(N=21)	42.9%	42.9%	38.1%	28.6%	38.1%	61.9%	61.9%	76.2%	38.1%
中年層(N=15)	86.7%	73.3%	80.0%	66.7%	80.0%	80.0%	100.0%	80.0%	80.0%
若年層(N=14)	50.0%	42.9%	14.3%	42.9%	64.3%	78.6%	78.6%	78.6%	57.1%
少年層(N=15)	60.0%	46.7%	40.0%	60.0%	80.0%	86.7%	86.7%	93.3%	86.7%
全体(N=65)	58.5%	50.8%	43.1%	47.7%	63.1%	75.4%	80.0%	81.5%	63.1%

※Nは母数とする。以下の表も同じ。

表 2 は、左側に-2 拍母音が/i/のもの、右側に-2 拍母音が/e/のものを配置し、その中で拍数の少ないものを左から配した。この順番は図 1、図 2 も同様である。表中の数字は、各年層の中で「切ろ」や「入ろ」を使うと回答したものの割合である。

まず先に図 2 から見てみよう。図 2 は調査結果から得られた割合を年層別に示したものである。

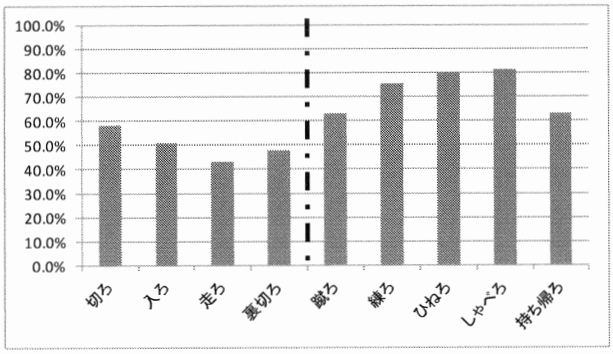

図１：-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の命令形（全体）

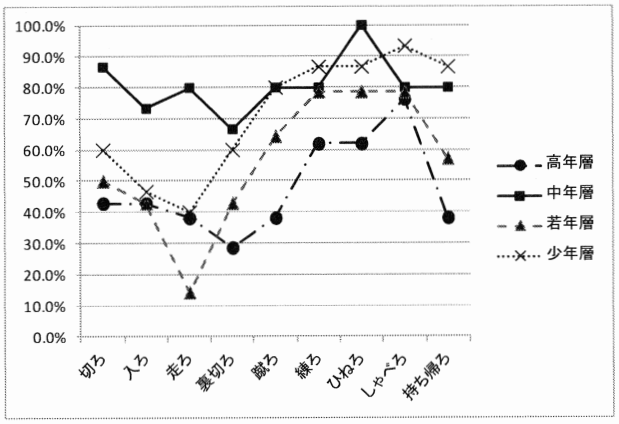

図２：-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の命令形（年層別）

これを見ると、概略中年層＞少年層＞若年層＞高年層という順に使用する割合が低くなっていることが分かるが、なぜこのような順番となるのかについての答えは現段階で見出せていない。言語意識など他の諸要因をあわせて考えなければならないと思われるため、これについてはこれ以上の言及は避けておく。

さて、次に図１と表２をあわせて見てみよう。これらを見ると、拍数という要因はあまり効いておらず、-2 拍母音が/i/か/e/かという要因が命令形「ロ」の割合に大きく関与しているのがわかる。-2 拍母音/i/のものは 60%を超えることはないが、-2 拍母音/e/のものは、「ひねる」「しゃべる」で 80%を超え、割合が低いものでも 60%を切ることはない。

-2 拍母音が関係する証拠として、表３も示しておく。これは-2 拍母音が/a//u//o/のものの結果である。中年層が 20%台にあるが、全体としては/i//e/のものに比べてかなり低い値となっている。やはり、-2 拍母音が/i/や/e/であること、つまり一段動詞に形態的に近似していることが命令形に「ロ」が現れる現象にとって重要だと言える。

表３：-2 拍母音/a//u//o/のラ行五段動詞の命令形

	上がろ	もぐろ	戻ろ
-2拍母音	a	u	o
高年層(N=21)	14%	10%	10%
中年層(N=15)	27%	27%	20%
若年層(N=14)	0%	0%	0%
少年層(N=15)	0%	0%	0%
全体(N=65)	11%	9%	8%

さて、ではなぜ-2 拍母音が/e/のもののほうが/i/のものよりも命令形に「ロ」が現れやすくなるのだろうか。

これに関しては、各活用の種類の所属語数の多寡によって類推が起こったことがその要因として考えられる。田附（2004）では上野（1986）に記載されている動詞の資料をもとにその所属語数を挙げているが、それによると以下の表４のように、五段動詞が圧倒的に多く、下一段動詞がそれに続き 30%弱、上一段動詞は全語数中の 4%程度であることがわかる。

表４：各活用の種類の所属語数と割合（田附（2004）より引用）

	五段	上一段	下一段	カ変	サ変	計
語数	841	56	372	1	1	1271
割合	66.2%	4.4%	29.3%	0.1%	0.1%	100.0%

そして、ラ行五段動詞の-2 拍母音別の所属語数と割合も挙げているが、これを見るとラ行五段動詞の中では-2 拍母音/i//e/のものが少ないことがわかる。

表５：ラ行五段動詞の-2 拍母音別の所属語数と割合（田附（2004）より引用）

	a	o	u	i	e	計
語数	138	58	46	34	15	291
割合	47.4%	19.9%	15.8%	11.7%	5.2%	100.0%

ここで、「ル語尾」動詞全体を-2 拍母音ごとに分けて考えると、-2 拍母音が/e/のものは、下一段動詞とラ行五段の中の-2 拍母音/e/の動詞、-2 拍母音が/i/のものは上一段動詞とラ行五段の中の-2 拍母音/i/の動詞、ということになる。表 4 と表 5 からその数を比べると、-2 拍母音/e/では下一段動詞が 372、ラ行五段の-2 拍母音/e/の動詞が 15 であり、圧倒的に下一段動詞の方が数が多いことがわかる。ここから、-2 拍母音が/e/のラ行五段動詞の命令形において「ロ」が現れやすいのは、数の多い下一段動詞への類推によって引き起こされたものだと推測できる。逆に-2 拍母音/i/では上一段動詞が 56、ラ行五段の-2 拍母音/i/の動詞が 34 となっていて、それほど数に差がない。上一段動詞には下一段動詞ほど類推を引き起こす力がないと見ることが出来る。このことがラ行五段動詞の-2 拍母音/i/の動詞と/e/の動詞の命令形に関する違いを生み出す素地にあると考えられるのである[注4]。無論、これだけが原因ならば他の活用形でももっと一段動詞に活用を近づけるということが起こるはずであるが、実際はそうではない。命令形が他に先んじて変化する要因を突き止める必要があろう。今後の課題としたい。

さて、調査では一段動詞「起きる」「寝る」の命令形についても質問している。こちらは命令形が「起きれ」や「寝れ」という語形になるかどうかについて尋ねたものである。結果は表 6 のように、「起きれ」や「寝れ」にまったくならないわけではないが、かなり低い割合であることが窺える。つまりここから、気仙沼市においては一段動詞の命令形はあまりラ行五段化しておらず、-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の命令形が一方的に一段動詞と同じ形態を取っている状況だと言えよう（ただし、それがどのように進んでいるのかは世代差からはわからないが）。

表６：一段動詞の命令形

	起きれ	寝れ
	上一段	下一段
高年層(N=21)	14.3%	14.3%
中年層(N=15)	40.0%	33.3%
若年層(N=14)	35.7%	21.4%
少年層(N=15)	33.3%	40.0%
全体(N=65)	29.2%	26.2%

4.2.2　音便の世代差

ここでは「ル語尾」動詞の推量・意志形における音便の世代差について述べる。これに関しては、ラ行五段動詞「帰る」について、共通語で「一緒に帰ろう」（勧誘）というときの「帰ろう」の部分を普段何というかという設問で調査をした。結果が表 7 である。

表 7 から、まず促音便である「帰っぺ」が高年層・中年層で 90%前後、若年層・少年層では 100%

の方に用いられていることがわかる。これは他の形態に対しても優勢であり、2005年度の調査結果にも合致している。

非音便形の「帰るべ」と共通語と同形の「帰ろう」に関しては、いずれも50%前後と、あまり世代差は見られなかった。それに対して、顕著に世代差が見られたのは撥音便「帰んべ」である。「帰んべ」の使用率を見ると、高年層の61.9%を頂点として、そこから年層が低くなるにつれ段々と使用率も下がっているのがわかる。ここから考えられるのは、高年層の上の世代では促音便と撥音便が均衡していた（どちらでもよかった）のが、徐々に促音便の方へ収束していくという流れである。宮城県北の内陸部では1980年ごろに撥音便が優勢だったのが、2010年の調査では促音便が優勢となっており（加藤・佐藤・小林（1982）および田附（2011）参照）、この促音便に収束する流れは気仙沼市だけではなく、宮城県北一帯で起こっている現象のようである。また、もう少し地域と年代を広げてみると、1980年代には栃木や福島、山形でもすでにこの撥音便から促音便への変化は見られており（井上（1984）参照）、北関東から南東北にかけて、（少なくとも）1980年代ごろから進行している現象のようである。本報告は、その現象の一端を気仙沼市において観察したものだと捉えることが出来る。

表７：ラ行五段動詞の促音便・撥音便

	帰っぺ	帰んべ	帰るべ	帰ろう
高年層(N=21)	90.5%	61.9%	57.1%	52.4%
中年層(N=15)	86.7%	40.0%	53.3%	60.0%
若年層(N=14)	100.0%	28.6%	42.9%	42.9%
少年層(N=14)	100.0%	13.3%	53.3%	46.7%
全体(N=64)	93.8%	38.5%	52.3%	50.8%

5　今後の課題

最後に今後の課題を述べる。

2005年の調査での一番の課題は何と言っても活用を体系として表すためにより多くの語、多くの後接形式を調べることである。今回は調査量の不足から調査資料をほぼそのまま提示したものとなったが、本来はここから形態的なまとまりを作り、動詞の活用体系全体を捉えることが出来るものを作らなければならない。

2006年度の調査に関しては、「ル語尾」動詞の推量・意志形における音便の世代差について調査し考察したが、前述の佐藤・加藤（1972）の言及のように、「べ」が推量なのか意志なのかあるいは勧誘なのかによって、「べ／ぺ」に接続する時の形態に使い分けがある可能性がある（田附（2011）参照）。今回の例文の「べ」は勧誘の意味だったが、推量や意志の例文にすると、また違った結果となる可能性もあるのである。

ここでは、気仙沼市における動詞の活用体系を素描し、その中で2拍母音/i//e/のラ行五段動詞の命令形、ならびに「ル語尾」動詞の推量・意志形の音便についてアンケート調査を行った結果とその考察を述べた。いずれもいささか調査不足あるいは考察不足の感は否めず、今後の課題も大きいが、それでも気仙沼市方言の一端を明らかにすることは出来たように思う。

注1　2007年度には南三陸地方で2006年度の気仙沼市のアンケート調査と同じような内容を面接調査にて行ったが、全体的に2006年度の気仙沼市の調査結果と同じような傾向となり、現時点ではそこに地理的な差異を見出すことが出来ていないため、本報告では2005年度と2006年度の結果に焦点を絞って述べることとする。

注2　もう少し詳しい観察が必要だが、否定形が共通語において3拍になるもの（「見る」「出る」「寝る」「来る」「する」）が長音で出やすい傾向にある。これは、長音の部分が短くなることにより拍数が少なくなることを防いでいるためであると考えられる。

注3　今回は一応この「カンベ」に関しては「食う」の活用に含めたが、本来的には「食う」ではなく「食らう」など他の動詞の可能性もある。

注4　もっとも上野（1986）の資料は気仙沼市での調査のために作られたものではないので、そのすべての語が気仙沼市で用いられているわけではないし、気仙沼市で用いられているがこの資料の中にはないという語もあるだろう。そして、ここで数として挙げているのは異なり語数であり、気仙沼市で交わされる実際の談話の中でどの活用の種類に属する語がどのくらいの頻度で用いられているかという点も類推には関与していると考えられるが、この点もここでは考慮されていない。ただ、この資料から得られた語数の比は実際の談話においても一定の傾向として現れると考えられ、そうであるならばここでの考察も的外れではないと思われる。

文　献

井上史雄（1984）「現代東日本のベイの分布と変化」『東京外国語大学論集』34

上野善道（1986）「青森市動詞のアクセント」『日本海文化』13（井上史雄ほか編 1994『日本列島方言叢書〈2〉東北方言考1　東北一般・青森県』ゆまに書房に再録）

加藤正信・佐藤和之・小林隆（1982）「宮城県北地方の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』19（井上史雄ほか編 1994『日本列島方言叢書3　東北方言考2　岩手県・宮城県・福島県』ゆまに書房に再録）

国立国語研究所（1994）『方言文法全国地図』第3集　大蔵省印刷局

小林隆（1996）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』45

斎藤孝滋（2001）『日本のことばシリーズ3　岩手県のことば』明治書院

佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』8・9（井上史雄ほか編 1994『日本列島方言叢書〈3〉東北方言考2　岩手県・宮城県・福島県』ゆまに書房に再録）

田附敏尚（2004）「青森県五所川原市方言の一段・ラ行五段動詞の活用」『言語科学論集』8

田附敏尚（2011）「「べ」の接続と用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室